

初期マルクスの自然価格・市場価格論

——「スマス抜粋第一ノート」を中心として——

岡 崎 栄 松

{ 1 }

マルクスの経済学研究がいつから開始されたかについては、これまでにいろいろの説があるが、比較的最近、山中隆次氏は、1983年1月6～9日、オーストリアのリッツでおこなわれた「マルクス没後100年記念集会」におけるJ・ローヤンの報告「いわゆる『1844年経済学・哲学草稿』問題」の邦訳への訳者〔解題〕のなかで、この「ローヤン報告」の特徴の一つとして、つぎのように述べておられる。

「まず第一は、初期マルクスの経済学研究の開始の時期をめぐる問題である。これまでは、とくにさきの『タウベルト論文』〔インゲ・タウベルト、渋谷 正訳「カール・マルクスの『経済学・哲学手稿』の日付に関する問題および疑問点』《現代と思想》青木書店、第38号、1979年12月、所収〕では、その開始時期は1844年5月ないし6月とされていた。これにたいし、ローヤン報告は、その開始時期を『独仏年誌』掲載のマルクス論文『ヘーゲル法哲学批判 序説』の執筆時期にまでさかのぼらせている。とくに、このマルクス論文と、マルクスのセー『政治経済学概論』への取り組み（これをマルクス「抜粋ノート」の最初とローヤン報告はみるが）との深いつながりを強調していることは注目すべきであろう。と同時に、このマルクスのセーへの取り組みとプルードン『所有とは何か』との関連を挙げていることも注目されよう」（J・ローヤン、山中隆次訳「いわゆる『1844年経済

学・哲学草稿』問題」〔解題〕《思想》岩波書店、1983年8月号、103—104ページ）。

このように、アムステルダム「社会史国際研究所」の所員であるJ・ローヤンは、マルクスの経済学研究の開始時期を1844年5月ないし6月とするタウベルト女史の見解には否定的で、それを「ヘーゲル法哲学批判 序説』の執筆時期（1843年暮から翌44年初頭）」にまでさかのぼらせる。この点については、上掲の引用文の内容からして山中氏自身もローヤン説を採っておられるようであるが、私も以前に表明しておいたように^(注)、ほぼ同じ意見である。

(注) 拙稿「いわゆるパリ・ノートと『経済学・哲学草稿』について——『ラーピン論文』公表以前を中心として——」本誌、第39巻第1号、1990年4月、1—2ページ参照。

なおまた、山中氏は上掲の一文のなかで、「マルクスの『政治経済学概論』への取り組み」を「マルクス『抜粋ノート』の最初」だとするローヤンの所説を肯定的に紹介しておられるが、この間の事情については、すでに「ラーピン論文」において詳細かつ適切に描かれていたところであった（Vgl. N. I. Lapin, *Vergleichende Analyse der drei Quellen des Einkommens in den „Ökonomisch-philosophischen Manuskripten“ von Marx*, 《Deutsche Zeitschrift für Philosophie》 Jg. 17, Heft 2, 1969, S. 199. 細見 英訳「マルクス『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」《思想》岩波書店、1971年3月号、105ページ参照）。

この当該箇所ではラーピンもいっているように、パリにおいて経済学研究を開始したばかりの若きマルクスは、そのころ「フランスにおけるスミス思想の最高の解説者」、あるいは「フランス経済学者の初期の学派の第一人者」と目されていたJ・B・セーの『政治経済学概論』から「セー抜粋」（いわゆるパリ・ノート中の「ノートI」）を作成することをもって出発点としたのだが、やがて「いくらもたたないうちに」マルクスはスミス『国富論』の「礎石的意義」に気づいて、これを「入念かつ全面的に検討しよう」と決意し、この『国富論』を全体にわたって深く研究するとともに、それからの詳細な抜粋ノートを作成したのであった。

この『国富論』からの抜粋ノートは、第一と第二の二つのノートに分かれていたが、いま、これら二つの抜粋ノートと『国富論』の五つの編との対応関係を示しておけば、つぎのとおりである。すなわち、「スミス抜粋第一ノート」（「パリ・ノートⅡ」）には『国富論』の第一、第二編からの抜粋文が書きつけられ、他方、「スミス抜粋第二ノート」（「パリ・ノートⅢ」）には『国富論』第三、第四編からの抜粋が抜き書きされたのであった（なお第五編については、その表題「主権者または国家の収入について」を書き記すにとどめられている）。

それはともかく、いわゆるパリ・ノートや『経済学・哲学草稿』を作成・執筆していたころのマルクスは、それらのなかで彼自身の自然価格・市場価格論を展開していたわけではない。しかし、「スミス抜粋第一ノート」には、スミスの自然価格・市場価格論の眼目と見なされる一連の文章が網羅的に抜粋されており（ただし、この「ノート」には若干の例外を除いて、マルクス自身のコメントはほとんど見当たらないのだが）、また『経哲草稿』（とくに「第一草稿」前段部分）では、それらの抜粋の数多くが、マルクス独自の流儀で転載・利用されていた。

ところで、アダム・スミスが『国富論』で特別の章をたてて自然価格・市場価格論をとりあつかっているのは、第一編第七章「諸商品の自然価格と市場価格について」のなかである。けれどもスミスは、彼自身が同章の末尾で述べているように、^(注)第一編の第八章から第十一章までの諸章（第八章「労働の賃金について」、第九章「資財の利潤について」、第十章「労働と資財のさまざまな用途における賃金と利潤について」、第十一章「土地の地代について」）での所論を、第七章における自然価格・市場価格論の延長線上で詳述しているのであって、この意味では彼の自然価格・市場価格論は、第七章～第十一章の全体をつうじて論述されているといつてよい。

(注) Cf. Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. by Edwin Cannan, 6th edn., London, 1950, Vol. I, p. 65. 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫、第1分冊、217—218ページ参照。なお、拙稿「アダム・スミスの自然価格論について——生産価格論の学史的考察——」（上）本誌、第27巻第3号、1978年8月、とくに3—4ページを参照されたい。

したがってわれわれは、(i)『国富論』第一編のこれらの章から、マルクスは「スミス抜粋第一ノート」にどのような文章をどのような形で（それらの順序や強調の仕方なども含めて）抜き書きしているか、(ii)これらの抜粋文のうち『経哲草稿』（「第一草稿」前段部分）にはどのような文章が転載・採録され、また、それらはマルクスによってどのようなコンテクスにおいてどういうふうに使われているか、といった諸点を吟味することをつうじて、そのころのマルクスが「自然価格」概念や市場価格の変動をどのようにとらえ、また両者の関連をどのように考えていたかを窺い知ることができよう。しかし、この小論ではわれわれは、課題を(i)の点に吟味・考察に限定せざるをえない。またマルクスは、『経哲草稿』（「第一草稿」）の執筆後に作成された「リカードウ抜粋ノート」でも自然価格・市場価格論をとりあげているが、これもこの小論では割愛せざるをえない。要するに、われわれは、「スミス抜粋第一ノート」の内容と状態の検討をつうじて、初期マルクスの自然価格・市場価格論のアウトラインを探り出し、またその含意と意義を探り当てること——ここに本稿の中心課題を設定しようというわけである。

[2]

さて、ここでわれわれは、「ラーピン論文」の訳者である細見 英氏が、その〔訳者まえがき〕のなかで、「1843年末から44年夏にかけてのマルクスの経済学研究の歩み」を「ラーピンの説く順序」にもとづいて整理・作成した「段階 (Studium)」＝および「階程 (Etappe)」区分のシェーマ (N・I・ラーピン、細見 英訳「対比的分析」への〔訳者まえがき〕、前掲《思想》101—102ページ参照) を示しておくことにしよう。

「第一段階」

- (イ) エンゲルス、プルドンらの経済学的著作との最初の出会い
- (ロ) 第一～第三抜粋ノート（セー、スカルベク、スミスからの抜粋）

(ハ) 「第一草稿」前段での所得の三源泉の対比的分析

「第一階程」（草稿Ⅰ—Ⅶページ）

「第二階程」（草稿Ⅷ—ⅩⅥページ）

「第三階程」（草稿ⅩⅦ—ⅩⅩⅠページ）

(ニ) 「第一草稿」後段の「疎外された労働」断片（草稿ⅩⅩⅡ—ⅩⅩⅦページ）

「第二段階」

(イ) 第四、第五抜粋ノート（リカードウ、J・ミル、マカロックからの抜粋と評注。エンゲルス「大綱」の要約）

(ロ) 「第二草稿」

(ハ) 「第三草稿」

以下、われわれは、ラーピンのこうした「段階」=および「階程」区分のシェーマを一応——^(注)というのは、私はそれを細目にわたってまで全面的に支持するわけではないからであるが——念頭におくことにしよう。

(注) この点については、拙稿「いわゆるラーピン論文とその公表直後の波紋——執筆順序の問題を中心として——」本誌、第39巻第6号、1991年2月、117—118ページを参照されたい。なおまた、渋谷 正「『国民経済学』批判の端緒の形成——『経済学・哲学手稿』〈第一手稿〉をめぐって——」東北大学《研究年報経済学》第4巻第2号、1978年10月、67—68ページをも参照のこと。

それはともかく、これらのうち「第一段階」(ロ)「スミスからの抜粋」にかんして、山中隆次氏は、アムステルダム「社会史国際研究所」での調査研究の結果をつぎのように報告しておられる。——「ここ「スミス抜粋第一ノート」では、スミス『国富論』第一、二編からの二回にわたる抜粋が、p.1—13には第一回の、p.13—23には第二回の抜粋が書きこまれ、最終ページ p.24にはマルクスの計算が記入されている。第一回は『国富論』第一編第一章～第七章と第二編第二章からの抜粋、第二回はそれ以外の残部、つまり第一編第八章～第十一章と第二編第一、三～五章からの抜粋というように、二度の抜粋の間には、一見何の変哲もない、ごく自然な関係しかないようにみえるが、しかし、抜粋の

内容を検討してみると、スミスの『労賃』論以下の三大所得分析にはじまる第二回の抜粋は第二編全体に及ぶ抜粋にもかかわらず、ラーピンの指摘するように、内容的に『労賃、資本の利潤、ならびに地代に関連する問題領域に集中している』特徴をもっている。このことは、このスミスからの第二回の抜粋が第一『草稿』前段のいわゆる三大所得分析の構想と、あるいはその執筆開始時期と深い関連をもつと想定できるのではなからうか^(注)。

(注) 山中隆次『「経済学・哲学草稿」と『抜粋ノート』との関係——ラーピン論文によせて——』《思想》1971年11月号、112ページ。ちなみに山中氏は、ひきつづいてつぎのように書いておられる。「参考までに、マルクスが第一『草稿』前段で、この第二『ノート』〔これは「パリ・ノートⅡ」＝「スミス抜粋第一ノート」のことであって、「スミス抜粋第二ノート」＝「パリ・ノートⅢ」ではない——引用者〕から利用しているスミス抜粋約60余箇所のうち、その大部分の約50余箇所は、この二回目のスミス抜粋からであることを付記しておきたい」（同上、112ページ）。

なお野沢 徹氏は、われわれが本文で引用した山中氏の所説に賛意を表しながら、つぎのように述べておられる。「この中断〔「第一編第八章の抜粋過程における一旦の中断」〕ののち、……第八章への再度の取り組みを始める際に、それを起点として、『経・哲草稿』第一草稿前段の市民社会分析の構想——すなわち、土地の領有と資本の蓄積以後の、分業を基礎とする『所有の支配』＝階級社会の分析を、スミスからの抜粋文の配列＝編成替えという形式で行なう構想——が生まれたと見てよからう」（野沢 徹「初期マルクスの経済学批判——『経済学・哲学草稿』第一草稿前段の市民社会分析——」専修大学《経済学論集》第11巻第1号、1976年9月、110ページ。力点は野沢氏）。

上掲のように、山中隆次氏は「スミス抜粋第一ノート」が、『国富論』第一篇第一章～第七章および第二編第二章からの「第一回」目のものと、第一編第八章～第十一章および第二編第一、第三～五章からの「第二回」目のものに分かれることを指摘したうえで、さらに後者は『経哲草稿』「第一草稿」前段部分の「いわゆる三大所得分析の構想と、あるいはその執筆開始時期と深い関連をもつ」ものとされているわけだが、こうした点は同氏が折にふれて力説されることであって、氏はこうも述べておられる。

「スミス『国富論』第一編第一章から第七章までと、それに直接つづいて抜

粹された第二編第二章について、マルクスは各章の表題を記すことなく、連続して本文からの抜粋をおこなっている。……マルクスは第一編第八章『労働の賃金について』以降に関しては、それまでとは異なり、各章の表題をまず明記し、しかもその各々にローマ数字Ⅰ、Ⅱ、……の序数を付して、各章本文の抜粋を開始している。この一連番号および各表題明記の有無をめぐる『スミス抜粋』の構えの変化も、のちの『第一草稿』前半での三大所得分析の構想と関連があるように思われる」（山中隆次「初期マルクスの経済学研究（Ⅱ）——パリ時代の『スミス抜粋』を中心に（その1）——」中央大学《商学論纂》第27巻第3・4号、1985年11月、137ページ）。「『国富論』第一編第八章の表題にはじまる、マルクスの付したローマ数字の一連番号は、この第二篇最終の第五章で、すなわちこの『スミス第一ノート』の最後で終了し、次の『スミス第二ノート』には、このマルクス独自の一連番号は付されていない」（山中「初期マルクスの経済学研究（Ⅱ）——パリ時代の『スミス抜粋』を中心に（その2）——」前掲誌、第28巻第1号、1986年7月、169ページ）。

さらに山中氏は、労賃、資本利潤および地代という例の三欄分割（原則としての）による「第一草稿」前段部分の「執筆開始時期」を推定して、こうも記しておられる。——「マルクスの『スミス抜粋』第一ノートは、……のちの『経哲草稿』、とりわけその『第一草稿』前半の『労賃』『資本利潤』『地代』の三欄に分けての、マルクスの三大所得にもとづく三大階級論の構想（スミスを中心とする国民経済学に対する批判）も、ほぼ、このスミス『国富論』第一編の第八章から第十一章の、とりわけ今みてきた『あらゆる文明社会の基本的な構成要素をなす』三大階級を、その基礎である賃金、資本利潤、地代の三大所得と社会の富の状態との関連で総合的に要約した『本章〔第十一章「土地の地代について」〕の結論』からの抜粋をなしとげた段階で、浮かびあがってきたものと推定することができよう」（山中「初期マルクスの経済学研究（Ⅱ）——パリ時代の『スミス抜粋』を中心に（その1）——」前掲誌、第27巻第3・4号、172ページ）。

「スミス抜粋第一ノート」と『経哲草稿』「第一草稿」前段の「対比的分析」とにかんする山中氏のこうした「推定」は、けだし、概して当を得たものとい

えよう。ここで「概して」というわけは、初期マルクスの場合、「三大所得にもとづく三大階級論の構想」について語ることは、それほど簡単とは思えないからである。この点については、しかし、初期マルクスの地代消滅論＝地主消滅論を立ち入って検討・考察する必要があるので、ここではたんに論点の示唆にとどめておこう。

さて、以下われわれは、当時のマルクスがスミスの自然価格・市場価格論についてどのような抜粋ノートを作成していたかを、「スミス抜粋第一ノート」の当該箇所即して（といっても数多くの抜粋文をすべて引用・検討するわけにはゆかないが）見ることにしよう。そうすることによって、初期マルクスの自然価格・市場価格論の輪郭といったものを、多少とも判然と浮かびあがらせようだろうからである。

よく知られているように、そのころのマルクスは、イギリスの経済学者たちの文献をフランス語で研究するのが常であったが、アダム・スミスの『国富論』の場合もそうであった。すなわちマルクスは、スミス『国富論』の研究（抜粋）にさいしては、パリで1802年に発行されたジェルマン・ギャルニエの新訳、全五巻（*Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations*; par Adam Smith. Traduction nouvelle; par Germain Garnier, T. I-V, Paris, 1802.）を使用した。なお、マルクスの「スミス抜粋第一ノート」のうちには、彼自身によって独訳されたうえでの抜粋もあったが、仏訳文のまま抜き書きされたものもあり、また、しばしば独仏混在の形での抜粋文も見られた。以下、われわれは、「スミス抜粋第一ノート」の内容と状態をできるだけ忠実に（ありのままに）伝えるために、こうした点を各抜粋文の末尾で示しておくことにしよう。

ところで、すでに一言したように、アダム・スミスが『国富論』で特別の章をたてて自然価格・市場価格論をとりあつかっているのは、第一編第七章「諸商品の自然価格と市場価格について」のなかであるが、マルクスはまず、この第七章からつぎの一文、すなわち「ある特定のとき、ある特定の場所での、賃金、利潤および地代の『平均率または通常率』は、自然率（*natürliche Taxe*）である」（*Marx / Engels Gesamtausgabe*, Vierte Abteilung, Band 2 (= MEGA[®]),

IV/2), Berlin, 1981, S. 342. 力点はマルクスによるイタリック体。要約的抜粋。独訳) という一文を引用する。そのうえで、彼はひきつづき、つぎのように要約・抜粋する。

「ある商品の価格が、地代、賃金および利潤をそれらの自然率にしたがって支払うのに必要なよりも多くも少なくもないものをもたらすならば、そのときその商品は、その自然価格で売られるのである」(Ebenda, S. 342. 力点はマルクス。要約的抜粋。独訳)。

これらの文章からしてわれわれは、当時のマルクスが、アダム・スミスにあっては商品の「自然価格」は「自然率」＝「平均率」での賃金、利潤および地代の合計だとされていると考えていたことを知りうるであろう。この場合、スミスの「自然価格」は簡単にいえば、平均賃金・プラス・平均利潤・プラス・平均地代であること、そしてそのさい、スミスはいわゆるc部分の補填の問題を忘れていたことが留意されるべきである。またわれわれは、スミスのこのような自然価格論の基礎ないし背景には、「賃金、利潤および地代は、いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉である」(A. Smith, *The Wealth of Nations*, Vol. I, p. 54. 前掲訳書、第一分冊、196ページ)とするスミス構成価値説の考えが横たわっている点に注意しなければならない。^(注)

(注) スミス自然価格論のこうした構成価値説的性格にかんしては、拙稿「アダム・スミスの自然価格論について——生産価格論の学史的考察——」(中)本誌、第27巻第4号、1978年10月、とくに38—39ページを参照されたい。

つづいて、マルクスは、市場価格にかかわるスミスのつぎの文章を引用する。——「ある商品がふつう売られる実際価格は、その商品の市場価格と呼ばれる。市場価格は、自然価格 (*prix naturel*) を下回るか、上回るかのどちらかである」(MEGA^②, IV/2, S. 342. 力点はマルクス。要約的抜粋。独訳混在)。

ところでマルクスは、「有効需要」と「絶対需要」とを区別しながら、この点にかんするスミスの所論を、つぎのように要約・抜粋する。——「あらゆる商品のこの市場価格は、げんざい市場に存在しているこうした諸商品の量と、それらをその自然価格で買う気になっている人々の需要との割合によって規定

される。このような需要は有効需要、すなわち貨幣的裏づけのある需要である。絶対需要、貨幣によって裏うちされていない需要は、なんの意味もないのである」（Ebenda, S. 342. 力点, ゴシックともにマルクス。要約的抜粋。ほぼ独訳。なお、前述のように、本稿では引用テキストのイタリック部分には力点を付し、テキストのゴシック体または隔字体の部分はゴシック体になっている。ちなみに、新メガ編集部によれば、強調の度合いは前者よりも後者のほうが強いとのことである）。

このようにマルクスは、市場では諸商品を「その自然価格 [= (平均賃金 + 平均利潤 + 平均地代)] で買う気になっている人々」の「貨幣的裏づけのある需要」だけが「有効需要」であって、「貨幣によって裏うちされていない」「絶対需要」は「なんの意味もない」とするスミスの所説を要約・抜粋する。そして、こんどはマルクスは、そのような「有効需要」と諸商品の供給量との割合によって市場価格が騰落する点を三つのケースに分けて説明したスミスの叙述をつぎのように要約的に抜粋する。

「〔i〕いま、市場へもたらされた商品の量が有効需要に及ばない場合には、買い手たちのあいだに競争がおこる。市場価格は、多かれ少なかれ自然価格以上に上昇するが、その程度は、商品の不足の大きさか、競争者たちの富や気まぐれか、また当該商品の重要さや必要性の程度に応じる。〔ii〕もし、市場へもたらされる商品の量が需要の量を超えるならば、事態は逆になるだろう。その場合には、ひとは部分的には、自然価格以下しか支払おうとしない人々にも売らなければならない。この人々が支払う価格は、不可避免的に全体の価格を引き下げてしまう。このような場合、市場価格は自然価格以下に下がるが、その程度は過剰の大きさか、あるいは売り手たちの競争の程度、または、当該商品の、即刻にも処分してしまうべき性質の大小のために、その商品を手放す彼らの必要性の程度に応じるのである。／〔iii〕需要と供給とが一致するならば、そのときには自然価格と市場価格とも合致する。売り手たちの競争は、彼らを強制して市場価格を自然価格にまで適合させる」（Ebenda, SS. 342-343. 力点はマルクス。要約的抜粋。ほぼ独訳）。

要するに、(i)「市場へもたらされた商品の量」、つまり供給量が「有効需要」

を下回る場合には、「市場価格は多かれ少なかれ自然価格以上に上昇する」、(ii) 逆に、ある商品の供給量が「有効需要」を超える場合には、「市場価格は自然価格以下に下がる」、そして(iii)商品の供給量がちょうど「有効需要」に見合うときには、その商品の市場価格はその「自然価格」と合致する、というのが A・スミスの説くところであったが、マルクスはスミスのこういう所説を「スミス抜粋第一ノート」に上のように手際よく要約・抜粋するのである。

ところで、『国富論』第一編第七章から「スミス抜粋第一ノート」への抜き書きはさらにつけられる。すなわち、マルクスは、需要供給不一致の状態を想定してのスミスの説明をつぎのように要約的に書き記す。

「もしある場合に、この〔供給〕量が有効需要を超過するならば、その価格の構成部分のあるものは、不可避的にその自然価格以下で支払われるにちがいない。いまもしこれが地代、利潤または賃金であるとすれば、土地、労働または資本の一部分をこういう仕事から引きあげさせるのが土地所有者、資本家または労働者の私的利益であろう。市場へもたらされる量は、まもなくちょうど有効需要を充足するに足りるだけのものになるだろう。こうした商品のさまざまな部分は、ふたたびその自然率にまで上昇するであろう。／もし市場へもたらされる量が、しばらくのあいだ自然価格を凌駕しているとすれば、事態は逆になるだろう」(Ebenda, S. 343. 要約的抜粋。独訳)。

こうして、商品の市場価格は、自由競争がおこなわれているかぎり、需給関係の変動をつうじて「自然価格」に引よせられる、というのがスミスの所見であるが、マルクスはこの点をつぎのように抜粋する。「……自然価格は、いっさいの商品の価格が不断にそれに引きつけられている中心点(Centralpunkt)である。／ある商品の市場売却を目的として使用された勤労の全量は、こういうふうにして、自然にそれ自体を有効需要に適合させる。それは、この需要に正確に照応しようと志向しているのである」(Ebenda, S. 343. 力点は引用者。要約的抜粋。独訳)。

このようにマルクスは、スミスの「自然価格」(= \langle 平均賃金+平均利潤+平均地代 \rangle)は「いっさいの商品の価格が不断にそれに引きつけられている中心点

(Centralpunkt) [スミス自身の用語は「中心価格 (central price)」だが]」であり、市場価格の運動の重心点をなすものと解するわけである。

[3]

以上、われわれは、『国富論』第一編第七章「諸商品の自然価格と市場価格について」からマルクスがその「スミス抜粋第一ノート」へ抜き書きした数多くの抜粋文（要約文も含めて）のうち、とくにスミス自然価格・市場価格論の核心的部分をなすと思われる一連の文章を列挙してきた。が、マルクスの「スミス抜粋第一ノート」では、さらに第七章から自然価格・市場価格論にかかわる若干の文章が抜粋されたのち、「自然価格そのものは、地代、利潤および賃金の自然率とともに変動する。こうして、これらの構成諸部分が考察されることになる」(MEGA[®], IV/2, S. 344. 要約的抜粋。独訳)と同章が結ばれる。そしてマルクスは、第八章「労働の賃金について」からの抜き書きに移り、その冒頭の二つの短いパラグラフ^(注)を抜粋する。

(注) 念のために、ここでこの二つの短い文章を引用しておけば、つぎのとおりである。——(一)「労働の自然的報酬または労働の賃金をなすのは、労働の生産物である」(Ebenda, S. 344. 力点はマルクス。逐語的抜粋。仏訳のまま)。(二)「土地の所有と資本の蓄積とに先だつ本源的状態のもとでは、労働の全生産物は労働者に属している。彼には、ともに分けあうべき地主も親方 (maitre) もいない」(Ebenda, S. 344. 逐語的抜粋。仏訳のまま)。

しかし、マルクスは、ここで第八章からの抜粋をいったん打ち切って、『国富論』第二篇第二章「社会の総資財の特殊部門と考えられる貨幣について、すなわち国民資本の維持費について」へと大きく飛んでいる。なぜか？ この点を問題にして山中隆次氏は、つぎのように説明しておられる。

「…… [当時の] マルクスは、貨幣は『流動資本』の一部をなすが、『流通の大車輪』にすぎず、したがって、社会の純所得を構成しないだけでなく、その維持費はこれを減少させさえするものであることを確認したうえで、この純所

得を構成する賃金、利潤、地代の各自然率の変動を考察している第一編第八章以降に立ち戻り、その抜粋をふたたび開始する。ただし、……これまでの抜粋とは異なり、第八章『労働の賃金について』以降は、各章の表題がローマ数字Ⅰ、Ⅱ……を冠して明記されるようになり、ここにこれまで以上に、マルクスの主体的なスミス抜粋の姿勢をよみとることができようし、またその抜粋文の、のちの『第一草稿』への引用・利用の度合も格段に増大していることを、やがてみることができるのである」（山中「初期マルクスの経済学研究(Ⅱ)——パリ時代の『スミス抜粋』を中心に(その1)——」前掲誌、152ページ。力点は山中氏）。

当時のマルクスがスミスにしたがって、貨幣を「流動資本」の一部と解していたのは、そのころの彼の貨幣＝および資本把握の限界をなすところだとすべきであろうが、いまはその点を措くとすれば、上掲の引用文における山中氏の所説は、すでに以前にも述べたように（本誌本号、7—8ページ参照）、概して当を得たものだといえよう。ここでは、しかし、私は『国富論』第一編第八章～第十章からのスミス抜粋の検討はすべて割愛して、いきなり同編第十一章「土地の地代について」からの抜粋文の考察に移ることにしよう。

さて、はじめにマルクスは、この第十一章の総論的部分から冒頭のつぎの一文を抜粋する。——

「土地の使用にたいして支払われる価格と見なされる地代は、当然、借地人がその土地の現在の諸事情のもとで支払いうる最高の価格である〔以上、仏訳のまま〕。借地契約の条件をとりきめる場合、地主は、借地人が種子をとり、労働に支払い、家畜その他の営農用具を購入・維持すべき資本を補填するのに足りる額に、その近隣における他の借地の通常利潤を加えた額よりも大きな生産物の分けまえが、借地人の手もとに残らぬように努力する。この分けまえこそ、借地人が損をせず満足できる最小の分けまえであることは明らかであって、地主がこれ以上の分けまえを借地人に残そうとする場合はめったにない。この分けまえ以上の生産物部分またはその価格部分がおよそどれほどのものであるとも、地主がそれを地代として自分の手もとに留保しようと努力するのは自然であり、またこの地代がその土地のいまの諸事情のもとで借地人が支払

いうる最高のものであることも明らかである〔以上、独訳〕……この余剰 (surplus) こそ、つねに土地の自然的地代 (*rente naturelle*) と考えてさしつかえないものであり、いいかえれば、大部分の土地がそれと交換に貸されるべきその地代を当然意味するものと考えてさしつかえないものなのである〔以上、仏訳のまま〕(MEGA[®], IV/2, S. 353. 力点はマルクス、ゴシックは引用者)。

この一文のうち、われわれがゴシック体にしておいた箇所から明らかのように、ここではスミスは、資本主義的商品におけるかの「第四の部分」(= c 部分) の存在を認めている。そして彼は、「土地の使用にたいして支払われる価格と見なされる地代」は「借地人が種子をとり、労働に支払い、家畜その他の當農用具を購入・維持すべき資本を補填するのに足りる額に、その近隣における他の借地の通常利潤を加えた額」を超える「価格部分」にはかならないと主張する。いいかえれば、スミスはここでは、地代は土地生産物の価格のうち、前貸資本(流動資本・プラス・「第四の部分」)に平均利潤を加えた額——つまり〈資本補填分+平均利潤〉——を超える「価格部分」=「余剰」だと考えているわけである。そしてスミスは、こういうものとしての地代を、「大部分の土地がそれと交換に貸されるべきその地代」であり、「土地の自然的地代」とであると強調するのである。

こうした、地代の定義ともいべきスミスの文章を抜粋したのち、こんどはマルクスは、土地改良のために投下された資本の利子と、「本来の地代」との区別にかんするスミスのつぎのような所論を抜粋する。

「土地の地代は、地主が土地の改良のために費やした資本の利得 (ein Gewinn des Capitals, ただしスミス自身の用語は a reasonable profit or interest for the stock) にすぎないと考えられるかも知れない。……場合によっては、土地の地代はある程度そのとおりであろう。……しかし〔以上、独訳〕地主は未改良の土地にたいしてさえ地代を要求するのであって、改良費の推定される利子または利潤は、一般にこの本来の地代にたいする追加分である。しかも、こういう改良は、必ずしもつねに地主の資財によってなされるとはかぎらず、しばしば借地人のそれによってなされる場合もある。それにもかかわらず、借地契

約が更新されるときがくると、地主は通例、これらの改良がすべて自分自身の資財でなされたものであるかのように、それと同じだけの地代の増額を要求するのである〔以上、仏訳のまま〕（Ebenda, S. 353. 力点はマルクス。要約的抜粋。なお、新メガ編集部の伝えるところでは、マルクスは、この文章全体についてオリジナル原稿の欄外に縦の傍線を引いて強調しているとのことである）。

このようにマルクスは、「地主は未改良の土地にたいしてさえ地代を要求する」こと、また、土地の改良は地主自身の資本によってなされるとはかぎらないことなどの点を指摘したスミスの文章を引用しながら、「本来の地代」を土地資本の利子——これはスミスによれば「本来の地代」への「追加分」にすぎない——から明確に区別すべきだとする。してみれば、さきほどの第十一章冒頭の一文でスミスが、「土地の使用にたいして支払われる価格と見なされる地代は」（力点は引用者）云々といっていたさいの「地代」は、この「本来の地代」、すなわち、借地農業者が地主に支払う借地料のうち土地資本の利子を控除した残余の部分のことを指していたわけである。

こうしてマルクスは、「本来の地代」を土地資本の利子から明確に区別するスミスの所論を抜粋・強調するのだが、そのうえでマルクスは、この「本来の地代」は「一個の独占価格（a monopoly price）」だと力説するスミスの主張を引いている。——「土地の使用にたいして支払われる価格と見なされる土地の地代は、当然、一個の独占価格である。それは、地主が土地の改良のために投資したであろうもの、または彼が損をせず^に取得したものにはまったく比例しないで、農業者が損することなしに支払いうるものに比例するのである」（Ebenda, S. 354. 力点はマルクス。逐語的抜粋。仏訳のまま）。

見られるように、当時のマルクスは、スミスの所論にしたがって、「土地の地代は、当然、一個の独占価格である」こと、そしてそれは「農業者が損することなしに支払いうる」——ということは「農業者」が〈資本補填分＋平均利潤〉を確保したうえで「余剰」を地代として支払う——のでなければならぬと考えていたわけである。

こうした点は、マルクスが上掲のスミスの文章にすぐつづけて、つぎのよう

に抜粋していることから窺いうところである。

「土地生産物のなかでふつう市場へもたらされる部分は、その通常の価格が、それを市場へもたらすために使用された資本を、この資本の通常利潤とともに回収するのに十分な価格のものだけである。もしその価格がこれ以上であれば、その余剰は自然に土地の地代になるであろう。もしこの通常の価格がこれ以上でないならば、たとえ商品は市場へもたらされるかも知れないにしても、この価格は地主に地代をあたえるのには十分でない。その価格がこれ以上であるか、それとも、そうでないか？ それは需要のいかんによるのである」（Ebenda, S. 354. 力点は引用者。逐語的抜粋。独訳）。

ここでスミスが、「それ〔販売される土地生産物〕を市場へもたらすために使用された資本」というとき、この「資本」が、補填されるべき前貸資本（かの「第四の部分」をも含めての）を意味していることは、さきの第十一章冒頭の一文を検討したさいに、すでに見ておいたところである（もっとも、スミスは第十一章においても、しばしばこの部分の存在を忘れるのだが）。そしてスミスは、このような意味での「資本」を「通常利潤とともに回収する」価格、つまり〈資本補填分+平均利潤^(注)〉のことを「十分な価格」だとするわけである。ところで、上の一文では、いまやスミスはつぎのように主張する。——土地生産物が「ふつう市場へもたらされる」条件は、その「通常の価格」が「十分な価格」（＝〈資本補填分+平均利潤〉）に達しているということであって、もしこの「通常の価格」がこれ以上に高ければ、その「余剰」は当然、地代になる、けれども「通常の価格」が「十分な価格」以上でなければ、「たとえ商品は市場へもたらされるかも知れない」が、「この価格が地主に地代をあたえるのには十分でない」、と。

（注） この「十分な価格」という訳語は、必ずしもスミスの原文に忠実なものではなく、彼の地代概念をより明確に示すために、われわれがあえて使用したものである。この点にかんしては、前記拙稿「アダム・スミスの自然価格論について」（中）、本誌、第27巻第4号、58—60ページをぜひとも参照されたい。

しかしながら、ここでわれわれは、スミスのこのような主張は、第七章での

彼自身の自然価格・市場価格論と大きく異なっている点に注意しなければならない。第七章ではスミスは、商品の「自然価格」は「自然率」ないし「平均率」における賃金、利潤および地代の合計だと規定していた。また、そこでは彼は、「それら〔諸商品〕をその自然価格〔= \langle 平均賃金 $\dot{+}$ 平均利潤 $\dot{+}$ 平均地代 \rangle 〕で買う気になっている人々の需要」を「有効需要」だとしながら、このような「有効需要」と「市場へもたらされた商品の量」つまり供給量との割合によって市場価格が変動する事情を、以下の三つのケースに分けて説明していた。すなわち、(i)ある商品の供給量が「有効需要」を下回る場合には、「市場価格は多かれ少なかれ自然価格以上に上昇する」、(ii)逆に、ある商品の供給量が「有効需要」を超過する場合には、「市場価格は自然価格以下に下がる」、そして最後に(iii)ある商品の供給量と「有効需要」とがちょうど一致するときには、その商品の市場価格と「自然価格」とは完全に一致することになる、と。

しかもアダム・スミスは、さらにすすんで、もし商品の供給量が「有効需要」を超えている場合には、その価格部分のあるものは、不可避免的にその「自然率」以下で支払われるにちがいない、いまもしそれが地代であるとすれば、地主たちの「私的利益」が彼らを刺激して、即刻にもその土地の一部を引きあげさせるであろう、また、逆の場合には逆のことがおこるだろう、と説いていた。

要するに、『国富論』第一編第七章では、ある商品の市場価格がその「自然価格」(= \langle 平均賃金 $\dot{+}$ 平均利潤 $\dot{+}$ 平均地代 \rangle)に達していることが、商品を市場へもたらすための条件だとされており、「いっさいの商品の価格」はこの「自然価格」を「中心点」=「中心価格」として騰落するものと解されていたわけである。こうして同章においてはスミスは、およそ自由競争を前提するかぎり、地代が恒常的にその「自然率」以下になったままの状態はありえない——なぜなら地主たちの「私的利益」が彼らをして、その土地の一部を引きあげさせるであろうから——、したがって、土地が生産にはいる場合には、地代はつねに「価格の構成部分」をなす、と主張していたのであった。

ところが、第十一章「土地の地代について」の冒頭部分になると、こんどは

スミスは、「十分な価格」に〈資本補填分+平均利潤〉を含意させながら、土地生産物が「ふつう市場へもたらされる」条件はその「通常の価格」が「十分な価格」に達していることだと述べる。そして彼は、土地生産物の「通常の価格」がその「十分な価格」を超過したさいの「余剰」をもって「自然的地代」つまり地代だとし、かつ、「通常の価格」が「十分な価格」を超えて地主に地代をもたらすかどうかは「需要」のいかに依存すると説く。だが、そうだとすれば、この場合には、地代は「十分な価格」からは最初から除外されており、また、それは土地生産物の「通常の価格」にも必ずしもはならない、ということになる。

こうして地代は、いまや「自然価格」の不可欠な構成要素の一つではなくなっており、土地生産物の「通常の価格」がその「十分な価格」(=〈資本補填分+平均利潤〉)を超過したときの「余剰」にすぎないものと見なされる。そしてスミスは、土地生産物の若干部分にあっては、「十分な価格」以上の高い価格を必ずつねに生じさせるほどの需要があるので、それらは必ずつねに地代をもたらすが、その他の土地生産物の場合は、それほどの需要があるとはかぎらないから、地代が生ずるときもあれば、生じないときもあると主張する^(注)。つまり、ここでは地代は、需要が「十分な価格」での供給を超えたさいの、「十分な価格」を上回る「通常の価格」の「余剰」分として説明されるわけである。

(注) Cf. A. Smith, *The Wealth of Nations.*, Vol. I, pp. 146-147. 前掲訳書, 第二分冊, 10—11ページ参照のこと。

[4]

しかし、アダム・スミスが地代を上のように説明することは、第七章（および後続の第八～第十章）での自然価格・市場価格論——そこでは、地代が恒常的にその「自然率」以下になっていることはありえず、だからまた、土地が生産にはいるさいには地代はつねに「価格の構成部分」をなすとされていた——を

彼自身が否認したことを意味するものにほかならない。後年、マルクスは『剰余価値学説史』のなかでスミス自然価格・市場価格論を詳細かつ綿密に考察したさい、この点について、つぎのように指摘している。

「スミスはこの『国富論』第一編第十一章ではまったく一変している。地代はもはや自然価格 (*prix naturel*) のなかにはいらない。というよりはむしろ A・スミスは、自然価格と違っているのが普通である通常の価格 (*prix ordinaire*) に逃げ道を求めている。といっても、われわれは第七章ではつぎのように聞かされていたのである。すなわち、通常の価格が長期間にわたり自然価格よりも低くなっていることはけっしてありえないし、また、自然価格の構成部分のどの一つでもが長期間にわたってその自然率よりも低く支払われているとか、ましてや、いま彼が地代について主張したように全然支払われないでいるなどということは、けっしてありえないのである、と」(*Theorien über den Mehrwert, Marx/Engels Werke*, Bd. 26, Teil II, Dietz Verlag, Berlin, 1967, S. 350. 『剰余価値学説史』、『マルクス＝エンゲルス全集』②Ⅱ, 大月書店, 463ページ。力点はマルクス, ゴシックは引用者)。またマルクスは同書において、もっと端的に、「彼〔スミス〕は自然価格にかんする自分の全学説をこの十分な価格をもってくつがえししてしまった」(*Ebenda*, S. 352. 前掲訳書, 466ページ。力点は引用者)とも書いている。

しかしながら、初期のマルクスも、スミス自然価格論のこうした自家撞着に早くも気づいていたのであって、げんに彼は「スミス抜粋第一ノート」に『国富論』第一編第十一章の総論部分から、つぎの一文を抜粋している。——「地代は賃金や利潤とは異なった仕方^で諸商品の価格の構成に参加する。賃金や利潤の額 (*taux*) の高い低い^は諸商品の価格の高い低い^の原因であるが、地代の額の高低は価格の結果である」(*MEGA*®, IV/2, S. 354. 力点はマルクス。逐語的抜粋。仏訳のまま)。

見られるとおり、スミスのこの一文にはマルクスは多くの力点を付しているが、そればかりではなく、彼はスミスのこの文章については、オリジナル・ノートの欄外に縦線まで引いて重視・強調している。こうしたことから察せら

れるように、初期のマルクスは、すでにスミス自然価格論の自己矛盾的性格を察知していたといっても過言ではなからう（もっとも、そのころのマルクスはこの点を言葉で明示的に表現していたわけではないが）。

しかし、同時に上掲の抜粋文は、スミス自身が自説の変化に気づいていたことを物語るものといってもよからう。マルクスは抜粋していないのだが、スミスは上掲の一文にすぐつづけて、つぎのように述べている。——「特定の商品の価格に高低があるのは、その商品を市場へもたらすために支払われなければならない賃金や利潤に高低があるからである。しかし、その商品の価格が生じる地代が高かったり、低かったり、あるいは全然地代を生じなかったりするのには、その価格に高低があるからである。いいかえれば、その価格が、これらの賃金や利潤を支払うに足る以上に、はるかに余ったり、ごく僅かしか余らなかったり、または少しも余らなかったりするからである」(A. Smith, *The Wealth of Nations*, Vol. I, p. 147. 前掲訳書, 第二分冊, 10—11ページ。力点は引用者)。

すでに見たように、第一編第七章ではスミスは、賃金、利潤および地代がそれらの「自然率」にしたがって、いわば一様に「自然価格」の「構成部分」になると主張していた。ところが、いまや彼は一転して、「地代は賃金や利潤とは異なった仕方では諸商品の価格の構成に参加する」のだという。また、以前には、「賃金、利潤および地代は、いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉である」(前出)とする構成価値説^(注)の立場から、賃金、利潤および地代の率の変動はそのいずれもが「価格の高低の原因」をなすと主張していたその同じスミスが、こんどは「賃金や利潤の高低は諸商品の価格の高い低い原因であるが、地代の高低は価格の結果である」(前出。力点は引用者)とする。さらにまたスミスは第七章では、たとえば地代がその「自然率」以下に減少する場合には、即刻にも土地の一部が引きあげられて、やがて市場価格が「自然価格」にまで上昇して地代がもたらされるようになる、と論じていた。ところが、いまや彼は「特定の商品の価格に高低があるのは、その商品を市場へもたらすために支払われなければならない賃金や利潤〔すなわち「十分な価格」、ただし、ここでは彼は、いわゆるc部分の補填のことを忘れている〕に高低があるからである」と説く。そ

して彼は、地代は「十分な価格」を超える「余剰」分だとする見地からして、「特定の商品」の「通常の価格」がその「十分な価格」よりもはるかに高ければ、それは多くの地代を支払うけれども、この超過分がごく僅かであれば地代も少なくなり、また、ある商品の「通常の価格」がその「十分な価格」にびったり一致するならば、それは少しも地代をもたらさない、というふうに論述するのである。

（注）このスミス構成価値説の詳細については、さしあたり前記拙稿「アダム・スミスの自然価格論について」（上）本誌，第27巻第3号，46—52ページを見られたい。

けれども、ここでわれわれは、スミスは「十分な価格」（＝〈資本補填分＋平均利潤〉）の概念を土地生産物だけでなく、非土地生産物にも適用している点を見落してはならない。この点は、スミスがとくに土地生産物に限ることなく、一般的な形で、「諸商品の価格」や「特定の商品の価格」をとりあげながら、「地代は賃金や利潤とは異なった仕方では諸商品の価格の構成に参加する」とか、「特定の商品の価格に高低があるのは、その商品を市場へもたらすために支払われなければならない賃金や利潤に高低があるからである」とか述べていたことから窺われるであろう。

ところで、以前にはスミスは、商品を市場へもたらしうる価格は「自然価格」（＝〈平均賃金＋平均利潤＋平均地代〉）であると主張していた。だが、いまや彼は、総じて、商品が「ふつう市場へもたらされる」条件はその「通常の価格」が「十分な価格」（＝〈資本補填分＋平均利潤〉）に達していることだとする。してみれば、いまやスミスが、「地代は賃金や利潤とは異なった仕方では諸商品の価格に参加する」云々と説くさいには、彼はまさにそのことによって、「十分な価格」を、第七章（および第八～第十章）での本来的な、第一の「自然価格」概念に代わるものとして提示しているといつてよい。そしてそのかぎりでは、第十一章において現われる「十分な価格」をもってA. スミスの新たな、第二の「自然価格」概念だと解すべきであろう。こうして、いまやわれわれは、つぎのようにいってよかろう。——アダム・スミスの「自然価格」概念は二重であって、〈平均賃金＋平均利潤＋平均地代〉を意味する第一の

「自然価格」概念が説かれているのは、第七章と後続の第八～第十章においてであり、他方、〈資本補填分+平均利潤〉を含意する「十分な価格」、すなわち第二の「自然価格」概念が現われるのは第十一章「土地の地代について」であ(注)る、と。

(注) スミスの自然価格論をもっと立ち入って考察すれば明らかになることだが、この第二の「自然価格」概念は第十一章になって突如として出てきたわけではなく、それはすでに第七章「諸商品の自然価格と市場価格について」のなかに伏在していたとすべきである。この点にかんしては、前記拙稿「アダム・スミスの自然価格論について」(中)本誌、第27巻第4号、67—70ページを参照されたい。また逆に、A. スミスは第十一章のところどころで第一の本来的な「自然価格」概念への復帰傾向を示しているのもあって、この間の事情については、前記拙稿の(下)、本誌、第27巻第5号、1978年12月、52—59ページおよび78—79ページを見られたい。

もとよりA・スミスが、第十一章に至って第二の「自然価格」概念＝「十分な価格」〈資本補填分+平均利潤〉を提示するときにも、彼は構成価値説の見地から脱却しているわけではない。だから彼は、第十一章でも、たとえば賃金や利潤の「自然率」を所与のものとして前提しつつ、「賃金や利潤の高低は諸商品の価格の高い低いの原因である」(前出、力点は引用者)といっている。しかしアダム・スミスが、「通常の価格」と「十分な価格」とを区別しながら、地代は「通常の価格」が「十分な価格」を超過したさいの「余剰」にほかならないと力説する場合には、彼は自説の展開において前後撞着しながらも、資本にとって「十分な価格」はその本性上、地代を排除するという事情を正しく理解していたといえるのである。そして、初期のマルクスがスミス「自然価格」概念の二重性に強く着目していたことは、当時のマルクス自身が、はやくも上の事情を、おぼろげながら感知していたことを意味するといっても過言ではあるまい。とすれば、ここにおいてわれわれは、「スミス抜粋第一ノート」が——マルクス自身の評注はきわめて少ないにもかかわらず——自然価格・市場価格論の展開にたいしてもつ大きな理論的・学問的意義をみとめるべきであろう。